

表現活動としてのパフォーマンスについて

—「筒男」・「乳男」の実践報告—

Performance as an Activity of Expression -Practice Report of "THE PYPE MEN" and "THE MILK MEN" -

● —宮崎宏康 Miyazaki Hiroyasu

I はじめに

日常生活の中でアートに親しむ。街でアートに触れる。私たちは、豊かな暮らしに必要な要素として、アートすなわち「芸術」があることを知っています。中でも「美術」的要素を含むものの存在は見過ごすことの出来ないものといえるでしょう。しかし、美術関係の人間は別として、実際に一般的な日常生活において、「美術」というものは、そこまで意識されているのでしょうか。

勿論、何気ない存在としての大切さもありますが、何気なさ過ぎたり、難解だったりすることで一般的な日常生活を送る人々の関心を失っていることがあるとしたら、少々問題があるかもしれません。

筆者は、見るものの関心をいかに惹き付け、楽しませるかを念頭に置いた作品づくりを進める中、同じく見せるという行為自体を作品とすることで見るものとの関わりを模索していた友人と共に、最も直接的に見るものの反応を感じることが出来る方法として、自らが作品となる路上パフォーマンスという形態に至り、より単純に面白い表現活動を目指して研究・実践を進めてきました。

本記述は、我々がどのような立場から表現活動を展開してきたかに関する活動実践の記録と考察です。

II 現在の日本における「芸術」を取り巻く流れ

1 「美術」に対する一般的な感覚

現在の日本において、「美術」という言葉の持つイメージは、一般にどのように捉えられているのでしょうか。

例えば、職場や初対面の集まりなどで、自分が「美術」に携わる者であることを述べる時、「はあ、それはすごいですねえ、私にはわかりませんが。」といった反応が返ってくるのがしばしばあります。おそらくそこには、「美術」とは少し高尚でちょっとよく分からないも

の、といったイメージが少なからずあることが伺われます。そしてそのイメージはいつの間にか親から子、友人から友人へと伝えられ、今日ではまるで当たり前のように社会に根付いてしまっている共通の感覚なのです。

昨今、数多くの作家や関連組織によってイメージの革新が図られ、「美術」をわかり易くする為の書籍なども刊行されたりしてはいますが、そもそも革新しなくてはならないその基盤には、それだけ「美術」が一般にはわかりにくいものであるという前提があるからなのです。

特に教育の現場では、図画工作や美術の授業をとおして、「美術を愛好する心情を育て」、「豊かな情操を養う」為の教育がなされてきたはずですが、結果として表れているのは、やはり「美術」に対する苦手意識や、自分とは住む世界が違う、といった感覚を持つ人々が少なくはないという事実です。

このように、「美術」が一般的には理解しづらい領域として存在することは、その純粹性の維持やその道の追求、目利性からの脱却といった観点からは必要な面もありますが、一般的な日常生活をする上で全く関わりを持たない、または意識しない人々に対しては、ますますその存在を遠ざける結果となっています。

そしてこれには、文学や音楽、演劇、伝統芸能といった他の「芸術」分野にも同じことが言えるのです。無数に広がる選択肢が存在する現在の日本において、そういった「芸術」分野は、その愛好家に対しては開かれていても、それ以外の人々に対しては、彼らが興味を持ってくれるのを待つという域を出ないものなのです。

2 閉塞する「芸術」分野と過剰供給される「大衆文化」

確かに、現在のように無数の情報が行き交う世の中で、「芸術」の各分野に興味を持った人々がそれを鑑賞し楽しむことは、その気さえあれば簡単に出来ます。しかし、だからといってそれが開かれた存在であるといえるでし

ようか。広く一般に親しまれるに至っているでしょうか。その分野の存在を知らない、あるいはあまり関心のない人々にまで、その存在を意識し理解してもらえらる程の力を持っているでしょうか。

自分たちの属する世界の中だけでの評価に満足し、関係者あるいはそこに足を運ぶような人ばかりが出入りする場所での活動に終始してしまい、部外者である多くの人々や、そこに足を運ばないような人々にまでその存在を理解してもらおうという意識が、これほど情報が発達していなかった時代に比べて結果的に低下しています。つまり、取り巻く環境がどんどん開かれるのに反比例して、結果的に作者や関係者の意識は無意識のうちに閉じられる一方であると言えるのです。

一方で、一般に「大衆文化」と呼ばれる漫画やアニメーション、ゲーム、テレビ番組、歌謡曲等は、お茶の間で楽しむものとして一般家庭に親しまれてきましたが、情報化、多様化の進む社会の中で人々の生活に溶け込みながらその存在価値を高め、中には「芸術」と呼ばれるものまで現れてきました。しかし、急速な多様化と過剰な供給により、鑑賞者や受け取る側の意識を越え、收拾のつかない状態になりつつあるという問題も抱えています。

3 双方向性への関心

このように、現在の日本においては、「芸術」は関係者や一部の愛好家の間での評価に偏り、一般に親しまれる存在ではなくなり、「大衆文化」はその普及に関しては目を見張るものがありますが、過剰な供給によって欲しくもない情報までもが一方的に一般家庭に流れ込むという極めてアンバランスな状況にあります。

このような状況を踏まえて、最近では作り手側の反省と受け取り手側の意識の変化により、情報が双方向に行き交い、お互いが影響しあって双方向に関係をかたちづくってゆけるインタラクティブな要素が目されるようになってきました。

「美術」の世界では、視覚のみにとどまらず、五感を駆使した体験型の美術館や科学館・博物館、そして子供のための文化施設(チルドレンズ・ミュージアム)などへの評価が高まり、観客が直接作品に触れることのできる、ハンズ・オン式の展示作品や、こちらから働きかけたり関わったりしてゆくことで初めて成立するインタラクティブアートなどが登場しました。(注1)

また、公共の広場、空間などに設置、発表されるパブ

リックアートや、作家がその土地に滞在し、制作・発表することによって、地域、環境そのものに美術をとりこむアーティスト・イン・レジデンスも注目を集めています。このような取り組みによって、街と美術の融合に一応の成功を収めている例は少なくありません。(注2)

「大衆文化」の世界ではFAXや携帯電話の普及、そしてインターネットの登場など、通信網の著しい発達と活用により、多くの情報のあり方が変化をみせ、参加する側の働きかけとそれに対する反応がよりダイレクトに成立するようになり、受け取る側の意志も反映されるようになりました。テクノロジーを駆使したインタラクティブなやりとりが、ゲームや通信、買い物のあり方までも変えようとしています。

このように、「美術」という立場からの、より直接的に作家や作品に干渉できる場や機会を設けることによって、身近でわかりやすいものとしてその存在を感じてもらおうという努力と、「大衆文化」という立場からの、情報の流れのありかたへの見直しの指針とテクノロジーの発達の成果として浮かび上がってくるのが、双方向性、あるいはコミュニケーションといったテーマなのです。

4 残された問題点

以上のように、様々な取り組みがそれぞれの方法論に基づいてなされていますが、それらは決して完全なものではなく、問題点もまたそれぞれにあることも否定できません。

例えば、体験型の美術館・科学館・博物館などにしても、そういった体験を享受できるのはやはりそこに足を運ぶような人々であって、そこに足を運ばないような人々に対する働きかけには至っていません。

その点、公共の空間に展開されるパブリック・アートは、道行く人なら老若男女、好むと好まざるに関わらず目にすることが出来ます。しかし例外を除くと、その性格上、景観を壊さない程度のほどよい作品に留まることも多く、どこにでもある風景として、そこに在りながらその存在を忘れ去られていることも珍しくありません。

このように、それぞれの取り組みは、一方で成果を上げつつも、各々に一長一短の性格があり、完全なものではないのです。そこで、単一的な視点ではなく、多角的な視点から、それぞれが自らの立場を踏まえた認識を持ち、全体として互いに補い合うことが大切になってきます。それに加えて、常に新しい可能性を追求する姿勢も忘れてはならないのです。

また、近年の情報テクノロジーの発達は、様々な情報機器を介したインタラクティブなやりとりの発達と普及に著しい成果を上げていますが、そのような機械文明の発達は、その便利さの反面、人と人との直接的なコミュニケーションの機会を減少させ、他者への思いやりに欠ける人間、人の命の重さがわからない人間までも生み出す背景になっている一面もあるのではないかとも言われています。

5 我々の表現活動

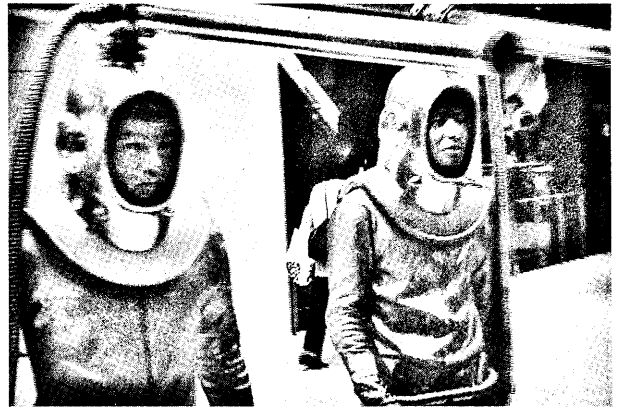
以上のような現状を踏まえ、我々は「美術」の新しい一端という立場から、展覧会場やギャラリーではなく、様々な目的を持った不特定多数の人間が行き交う路上に出て、ただ観られるのを待つだけの展示作品や、一方的に見せるだけのパブオーマンスではなく、我々の活動に参加者が加わることによってはじめて作品が成立するかたちの表現活動を進めてきました。

また、あくまで直接コミュニケーションにこだわり、視覚、聴覚のみならず、触覚、嗅覚、味覚など五感に直接訴えかける行為を通して、現代社会に生きる人々と肌と肌のふれあいによってのみ感じる事が出来る温もりや優しさを共有しようと考えております。

III 実践の記録

1 「筒男」 - The pype men -

「筒男」は、頭に長い筒状のものを取り付けた二人組が街に出て、道行く人々の両耳をはさみこみ、その筒を通して、不思議な音や小洒落た言葉などを聴かせるという作品です。よく、貝殻やパイプの先に耳を当てると海の音が聴こえると言われますが、「筒男」は、そこにカモメや大波を登場させたり、時には異次元の彼方や懐かしいあの日を思わせる音を聴かせたり、さらには全然関係ない素朴な疑問を投げかけたりと、臨機応変にその世界を変えてゆきます。また、一つの場所に留まることなく、挟まれてくれる人を求めて彷徨い歩き、電車に乗って移動したりもします。その道中、話しかけてくる人、無視して通り過ぎる人、様々な反応がありますが、「筒男」が街に現れることによって巻き起こるすべての出来事を作品の一部と考え、様々なかたちのコミュニケーションを図ります。

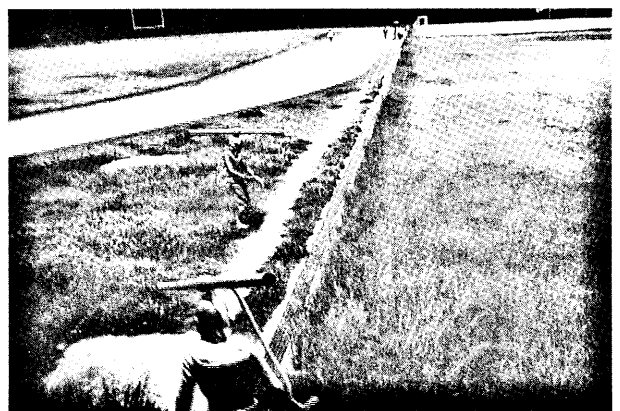


「筒男」の二人。左が「筒男・銀」、右が「筒男・金」。

「筒男」の旅立ち：



出発。シルエットも美しい。

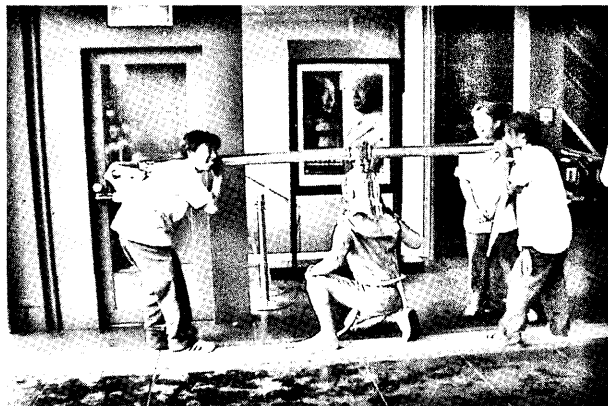


グラウンドの芝生とのコントラストが何ともいえないメルヘンな雰囲気を出しています。

京都駅ビルにて：



とりあえず陸上部と一緒にランニングしてみます。



こんな形も可能。まさに人とのパイプ役です。



「筒男・金」、駅のホームで女子高生をとらえる。目が合えばそこからもう「筒男」との交流は始まっています。



NHKの取材を受ける。その日の夕方のニュースで放映されました。京都新聞の取材も受け、翌日の朝刊になぜか社会面で載りました。

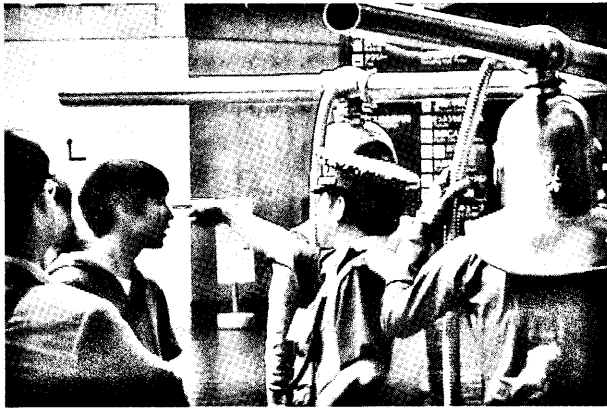


「筒男・銀」も参加。とりあえず電車到着のアナウンスなどを吹き込んでみました。

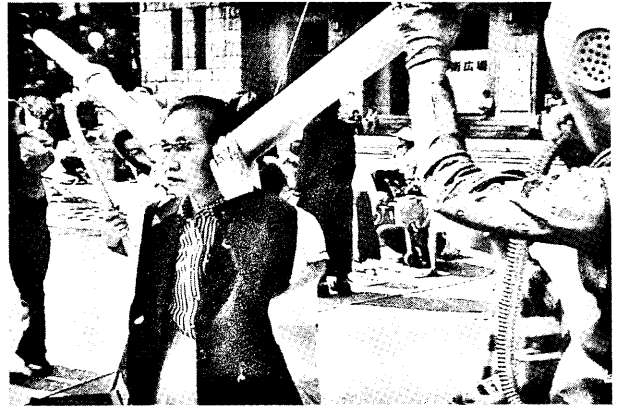


駅ビル警備員に呼び止められる。この後警備員室まで連行され、事情聴取を受けることとなります。

京都市役所前広場にて：



駅ビル追放。ちなみにすぐ側に交番もありましたが、警察に注意を受けることはありませんでした。



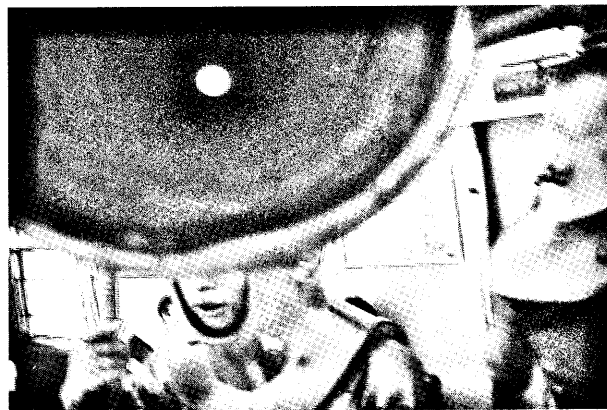
まず、波の音を聴かせてみる。(「ざっぱ〜ん」、「ざっぱ〜ん」などとくちで言っています。)



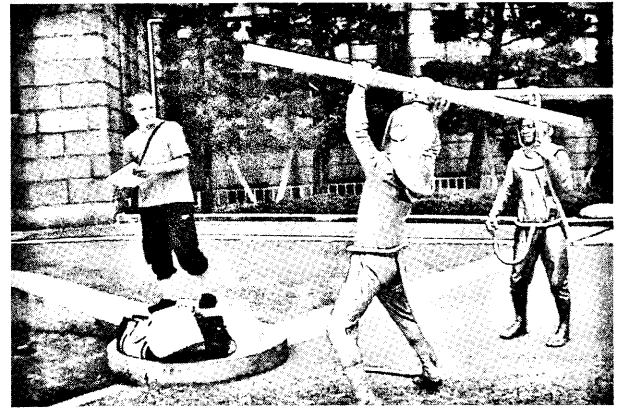
仕方がないのでとりあえず電車で移動。筒は邪魔にならないように網棚の上へ。



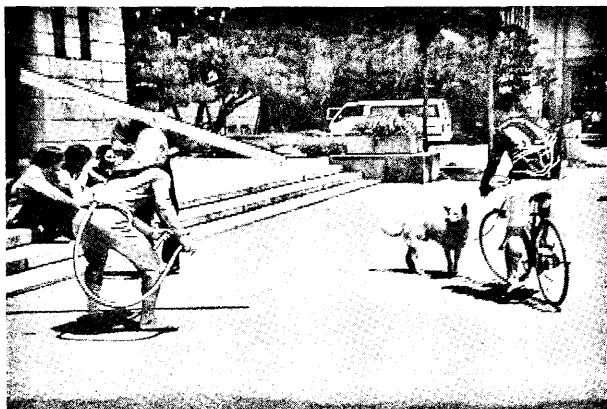
イギリスからきたジョナサン。彼の日本思い出の中には、金閣寺、銀閣寺、とともに「筒男」との出会いが刻み込まれていることであろう。



筒の中は空っぽです。子供にはよく覗かれます。穴があれば覗きたくなるのが彼らの習性です。

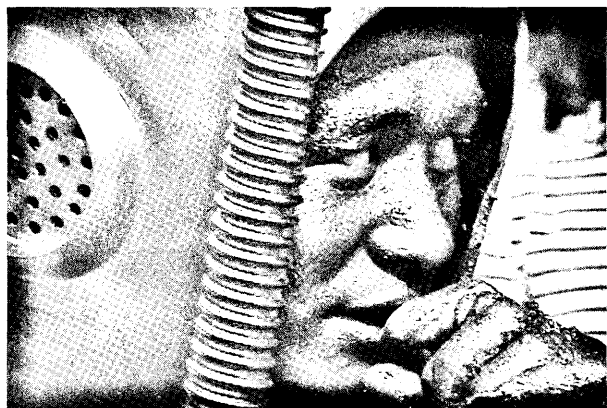


お礼の踊り。頭の筒をぐるぐる回転させて感謝の意を表します。ペアリングでよく回ります。



犬と「筒男」。犬の耳は挟めませんでした。とりあえず筒を通して犬の鳴き声で応えます。反響がすごいので、犬の反応もひと味違います。

挟まれる人々：



「筒男・金」吹込み中。この為に、モンゴルの歌唱法・ホーミーを練習していました。



少し(?) 怯えているようです。



一発ギャグで攻めることもあります。笑わせることも、「筒男」の目的のひとつです。

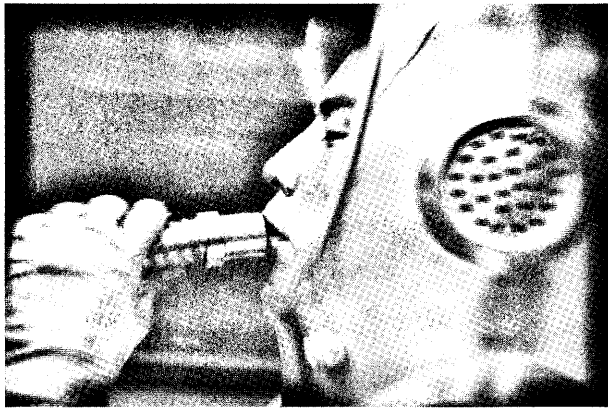


どこかの教授(?) 最初はしかめっ面で聞いていましたが、なんとか笑わせることが出来ました。



某作家の作品に似ていますが、偶然です。使う原理は一緒なので本当に似ていますが・・・。作品の性格は全く異なるものです。

東京・渋谷にて：



「筒男・銀」吹込み中。筒そのものを楽器のように使うこともあります。



東京・渋谷に来てみました。TV東京系「たけしの誰でもピカソ」に出演した帰りです。京都とはまた雰囲気の違いが、人の多さに圧倒されます。



小学生ぐらいの子供なら、まず怯えることなく興味を示してくれます。



とりあえず手堅く子供から。しかし、このあと本物の「その筋の方々」に声をかけられ、その場を離れました。



我々自身のイメージの源も、小学生ぐらいの時に面白かったことから生まれたものなのです。



顔黒メイクの女の子たちを挟むことに成功。但し京都に比べて若者の参加率は低いものでした。

「乳男」の基本パターン：



外国人は、基本的にパフォーマンスに対しての理解があるのか、観光の目的からか、積極的に参加してくれることが多いようです。海の音を聴かせると泳ぐふりをまでしてくれました。



男、ベンチに座っている。

2 「乳男」 - The milk men -

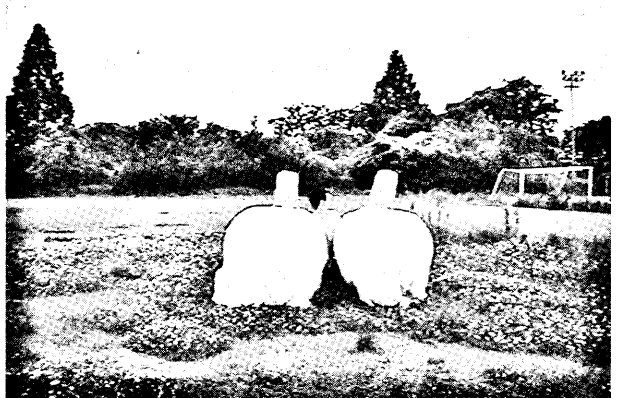
「乳男」は、巨大な乳房を思わせる大きくて柔らかな塊に扮した二人組が、路上に出て道行く人々をやさしく挟みこんだり、ほおずりしてもらったりして、そのえもいわれぬ感触を楽しんでもらうというものです。頭頂部からは、乳臭い空気を吐き出し、たまにミルクキャンデーなども飛び出す仕組みになっており、触覚のみならず、嗅覚・味覚までも「乳男」の世界に埋もれることができます。

携帯電話やインターネットなど、便利なコミュニケーションツールの普及に伴い、スキンシップのような直接コミュニケーションの不足が指摘される現代に生きる人々と、まさに肌と肌のふれあいによってのみ感じられる温かい関係を共有することができます。

また、家庭用電源を使用して体内に空気を補充するため、電源を提供してくれる親切な店などを求めて坊律い歩くことになり、その道中に会ったすべての人々との関わりが作品の一部になると考え、様々な形のコミュニケーションを展開してゆきます。



「乳男」出現。



「乳男」、男を挟む。



「乳男」、乳首の先から乳臭い空気を吐く。
ミルク飴も吐く。



男、ミルク飴を舐める。
「乳男」、満面の笑み。



男、逃げる。



「乳男」、去る。
男、呆然と立ちつくし、それを見送る。

京都駅ビルにて：



男、戻ってミルク飴を拾う。
「乳男」、それを見つめている。



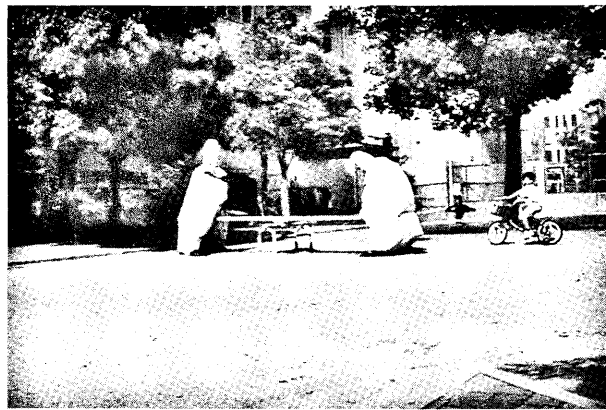
京都駅ビルでのパフォーマンス大会にやって来ました。「筒男」の時のように無許可ではないので、警備員につかまることはないのですが・・・。



「乳」であることに問題があったらしく、駅ビル催し者担当の人の判断で電源を止められ、またもや追放。



四条のお寺に頼んでコンセントを貸してもらうことにしました。実はすでに何軒も断られているので本当に救われた思いです。



取り敢えずシーソーに乗ってみました。
電源がないと「乳男」は萎んでしまうのです。

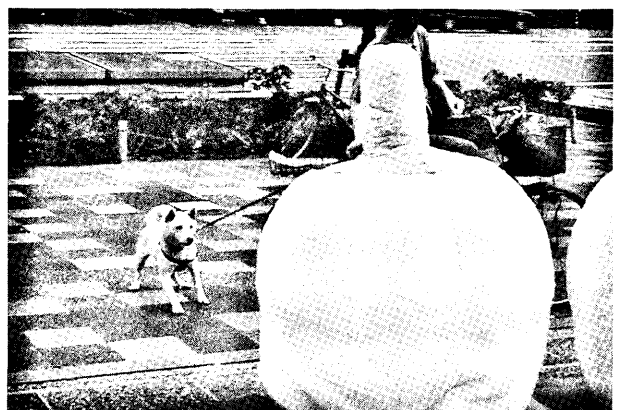


「乳男」を触る老紳士。お寺の前にて。

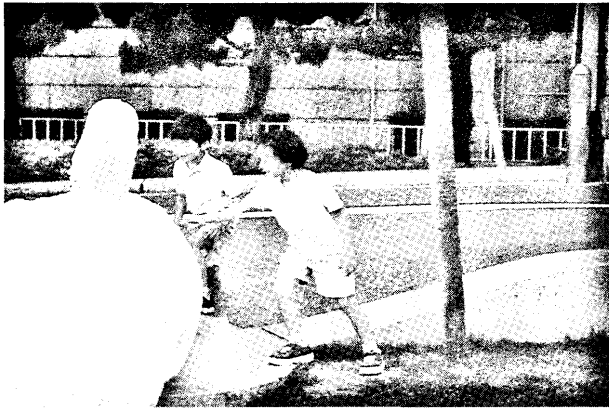
京都市役所前広場にて：



京都という場所柄、よく修学旅行生に囲まれます。萎んでいるので挟んであげられないのが残念です。



犬と「乳男」。
京都市役所前広場前では、毎年6月頃、「アート楽市」なる催し物がされており、そこを訪れてみました。



接近する子ども達。最初はおそろおそろでも・・・



とりあえずパンチ。子供は、着ぐるみを見たと殴ったり蹴ったりする習性があります。しかし、かつてない柔らかな感触に驚きの色を隠せません。



慣れてしまえばもうひっぱりだこです。乳首の先から出たミルク飴を、また乳首の先に詰め込んでいます。

京都・四条寺町、古着屋の前にて：



こんにちは、「乳男」さん。商店街の子供です。古着屋さんの店員さんがコンセントを貸してくれました。



中身は？
外側のふんわりした印象とは裏腹に、中身はすね毛だらけで汗だくの男です。



実際に挟まれてみると子供の背の高さが一番気持よさそうです。もう一人の男の子は、周りで見ている人の手を引いて誘ってくれています。我々のことを「ふわふわくん1号・2号」と呼ぶことに決めたようです。



もう病みつきです。
我々が子供の頃に面白かったことがイメージの源なので、やはり子供が一番喜んでくれます。



クウェートから来たジョー。言葉は通じなくても共有できる感覚は同じです。



挟まれすぎてダウン。
彼らが大人になったとき、我々のような大人がいたことを覚えていてくれるでしょうか。

挟まれる人：



実に多くの人々が「乳男」の間に挟まれ、乳臭い空気を身に纏い、ミルク船をほおぼりながら笑って帰りましたが、あくまでもそれは、我々と挟まれた人の関係にとどまるものです。今後の課題としては、我々を取り巻く人どうしの関係をつなくような試みを思案中です。



挟まれて大喜び。挟んで揉まれて笑ってくれた時が我々にとっても至福の時です。

IV まとめ

以上のような内容が、我々の考える、身近で単純に面白い「美術」のあり方の一つです。

実際の活動をとおして、実に多くの人々との奇妙なコミュニケーションが生まれ、その結果、我々も確かな手応えを感じることができました。同時に、当然のことながら様々な問題点が浮かび上がってきます。

まず、一口に路上とは言っても、普通の住宅地もあれば繁華街もあり、それぞれに異なる性格をもっています。

我々は、人々の日常生活の一場面に登場し、より身近に生きた美術を感じてもらいたいという主旨をもっており、出来るだけ多くの人々に出会う為に、なるべく人の

多い場所を求めて移動します。すると、必然的に繁華街やお祭り広場の方へ向かうこととなりますが、そのような、もともと一種浮き足立った雰囲気漂う場所では、すでに日常性は薄れており、生活の一場面として路上で出会ったというよりは、非常に特殊なお祭り騒ぎ的状况下の出来事として一線を引かれてしまうという矛盾を抱えているのです。

また、パフォーマンスの現場には多くの人ばかりができますが、実際に扶まれたりして参加する人以上に、傍観者として周囲を取り巻く人々の数が圧倒的に多いという事実があります。そしてその中には、興味はあるけれども恥ずかしくて参加できないという状態の人も少なからず含まれているのです。単純なことのようですが、この「恥ずかしい」というハードルを越えてもらわなければ成立しないという点において、我々の活動は開かれていないと言えます。(しかし、そこを我々の働きかけで解き放つことが出来たとき、一種清々しいものを共有できることも確かです。)一方で、当然のことではありますが、我々の働きかけや存在にまったく目もくれずに無視して通り過ぎる人もいます。

このように、路上に出るということは、本当にあらゆる事態が起こり得るものであり、十人十色の関わり方があることが分かります。しかし、どのような関わり方にせよ、我々が街に現れることによって起こる出来事を、偶然にも目撃あるいは体験することによって、その心に何かを感じ、帰って今日の出来事を誰かに話し、笑ってもらえるならば、我々の行為は成功したと言えるのです。

(注1)

子供のための体験型ミュージアムの例として、

- ・『横浜子ども科学館』神奈川県横浜市
 - ・『キッズプラザ大阪』大阪府大阪市
 - ・『湘南台文化センター子ども館』神奈川県藤沢市
 - ・『パルテノン多摩』東京都多摩市
- などがある。物理、科学などの仕組みを楽しく学べる装置や、ワークショップなどの催しが体験できる。

ハイテクノロジーによるインタラクティブな作品が見られる場の例として、

- ・『名古屋市青少年文化センター [アートピア]体験の場』愛知県名古屋
- ・『NTTインターコミュニケーション・センター』東京都新宿区
- ・『白石市情報センター[アテナ]』宮城県白石市
- ・『フジタヴァンテ』東京都渋谷区

などがある。メディア・アート、インタラクティブ・アートと呼ばれる最先端の技術を使った装置が体験できる。

作品を「見る」だけの空間ではなく、見る人が主体的に参加し直接的な体験が出来る展覧会あるいはアートプロジェクトの例として、

- ・『ワンデイ・ミュージアム』兵庫県川西市市庁舎 (1993・兵庫県)
- ・『えがお小学校100アート・ワークみの』岡山市御野小学校 (1994・岡山県)
- ・『万人のための美術展』こどもの城アトリウムギャラリー(1997・東京都)

などがある。アーティストと呼ばれる人々だけでなく、市民の積極的な参加によって展示やワークショップなどがおこなわれた。

(注2)

公共の場、空間に設置されるパブリック・アートの例として、

- ・『ファーレ立川』の作品群 東京都立川市
 - ・『杉並知る区ロード4つのオアシス』の作品群 東京都杉並区
- などがある。上記の例は、地域ぐるみで計画的に設置されたものである。パブリック・アートは、数え上げればきりが無いが、いずれもともすれば殺風景であったり平凡になりがちな景観に変化を与えるものであることに間違いはない。
- ・『ミュージアム・シテイ天神』福岡県福岡市天神エリア (1990~)
 - ・『芸術祭典・京』京都府京都市 (1990~)
 - ・『鶴来現代芸術祭』石川県鶴来町 (1994~)
 - ・『IZUMIWAKUプロジェクト』東京都杉並区 (1994~)
 - ・『桐生再再演』群馬県桐生市 (1994~)
 - ・『モダンde平野』大阪府大阪市 (1996~)

などがある。各々の都市空間を生かしたアート・フェスティバル若しくはアート・プロジェクトであり、地域の活性化、イメージアップに一役買っている。